



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	品類足論の原文について
Author(s)	今西, 順吉
Citation	北海道大學文學部紀要, 25(2), 1-37
Issue Date	1977-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33411
Type	departmental bulletin paper
File Information	25(2)_PR1-37.pdf



品類足論の原文について

今
西
順
吉

一、はじめに	三
二、品類足論の断片	四
三、俱舍論に引用された品類足論	一五
四、阿毘曇五法行經の前文について	三一

品類論足の原文について

今 西 順 吉

一、はじめに

品類足論の原典について研究するための資料の一部として第二「智品」第六「弁攝等品」の各断片及び、梵文資料という特性の故に、俱舍論の中に引用された品類足論の文をまとめた。前者は公刊されたテキストにもとづくもので、原写本について調査したものではない。また引用された文も俱舍論のみに限定する理由はないのであって、何れもさらに整備・拡充する必要がある。しかし梵文資料の増加は漢訳文献の検討のためにも不可欠であるので、とりあえず現在の形にまとめておいた。

なお阿毘曇五法行経の検討は、梵文資料に関するものではないが、原典の形態に関する試考であるのでここに併載することにした。

二、品類足論の断片

トウルファン出土写本断片の中に、ヴァルトシュミット教授のカタログ⁽¹⁾において番号五九九を与えられた四葉の断片がある。このカタログは次のような比定を行っている。

Bl. 110-1 (13) : Saṅgītsūtra

Bl. 110 : Saṅg-paryāya IV. 1 (3) :

Bl. 111 : Saṅg-paryāya IV. 1 (6)-8 (2)

Bl. 1 (13) : Saṅg-paryāya IV. 7-10 (2)

そして未比定の Bl. Nr. 12 についてはローマナイズしたテキストを提供している。

さて、その後、ローゼン女史による研究⁽²⁾が発表されたのを見ると、三葉を Saṅgītiparyāya すなわち集異門足論の梵文断片として扱っておられる。しかしその比定が妥当ではないであろうことは、両者の間に充分な対応を欠いていることから看取される。そこで、提示されている断片のテキスト⁽³⁾にかえて検討した結果、この三葉は品類足論の断片とみなしてよく、また未比定の一葉も品類足論のものであると結論しえた。以下に漢訳等との対照を示すが、特に断わらない場合は玄奘訳を指す。

Bl. Nr. 12 は品類足論の第二品「弁諸智品」⁽⁴⁾の一部である。

(V 1) (dharmañā) n[am] kaṭi jñānāni kaṭināṃ ca jñānāṃ

[p] r (adeśaḥ).....

法智幾智全。幾智少分。答法智是法智全。
七智少分。謂他心智苦智集智滅智道智

(2) kṣeyajñānasya anutpāda-jñān [']¹⁾.....

1) Lies : jñānasya.

(3) (dubhkhajñāna) sya samudayajñānasya nirodhajñ (ñānasya)

.....

(4) (pa) racitajñānaṃ eva caturṇāṃ ca jñān (ānāṃ pradēśaḥ)

.....

(5) paracitajñānaṃ paracitajñānaṃ eva.....¹⁾

1) Falsch wiederholte Zeile 4.

(6) (saṃvṛtījñānaṃ saṃ) v¹⁾jñānaṃ eva ekasya ca jñānaprade-
||[s] (aḥ).....

1) Lies : saṃvṛtī-

(R 1) (a) nṛvayajñānasya kṣayajñānasya a[ṇu] (tpādayajñānasya ca).....

(2) (mārgajñānaṃ mārgajñānaṃ e) va pañcānāṃ ca jñānānāṃ
pradēśaḥ. dha[ṛṇu] (ajñānasya).....

盡智無生智。

類智是幾智全。幾智少分。答類智是類智全。七智少分。謂他心智苦智集智滅智道智盡智無生智。

他心智是幾智全。幾智少分。答他心智是他心智全。四智少分。謂法智類智世俗智道智。

世俗智是幾智全。幾智少分。答世俗智是世俗智全。一智少分。謂他心智。苦智是幾智全。幾智少分。答苦智是苦智全。四智少分。謂法智類智盡智無生智。集智滅智應知亦爾。道智是幾智全。幾智少分。答道智是道智全。五智少分。謂法智類智他心智盡智無生智。

- (3) (kṣeyajñānaṃ kṣaya) jñānam eva śaṇṇaṃ ca jñānānaṃ
pradeśa (ḥ)

盡智是幾智全。幾智少分。答盡智是盡智全。六智少分。謂法智類智苦智集智滅智道智。

無生智亦爾。

- (4) kiṃ dharmajñāna(m) dharmajñānam eva

何故法智是法智全。答法智知欲界繫諸行

- (5) (kāmapratīsaṃyu ktānāṃ saṃskārāṇāṃ) nirodhaṃ jñāti
kāmapratīsaṃyu [k] (tānāṃ saṃskārāṇāṃ)

毘曇論——知欲界繫行苦。知欲界繫行因。知欲界繫行滅。知斷欲界繫行道。六二九下)

- (6) (saṃskārā) ṇāṃ prahāṇāya māge anāsravāṇ pa (raitta-
caittān jñāti)

何故法智是他心智少分。答法智知欲界繫諸行能斷道中他無漏心所故。

次に Bl. 110~1 (13) は第六品「弁攝等品」⁽⁹⁾の中の三法の終りから四法のはじめにかけての部分に相当する。
(110V1) (a) kuśala (karma) katarat. (a) [k] (u) śa [a] (kā-
yakarma)

不善業云何。謂不善身語業及不善思。無記業云何。謂無記身語業及無記思。

(2) [śai] kṣ [ā] ce [tanā].

aśai [k] (ṣa) ka (rma) katarat. a(śaikṣa) kāyakarmo

(3) (darśanaprahātavyaṃ) karma katarat. yat karma (śraddhā-
nusāri) ca dharmānu[s] ā (ri)

(4) (ce) tanā.

bhāvanāprahāta[vya](ṃ) (karma katarat. yat [karma]

(5) (tatsa) mutthaṃ ca kāyakarma akliṣṭa(ṃ) [ca sāsrava-]
karma.

(a) prahātavyaṃ karma [ka] (tarat.)

(6) (dṛṣṭadharmavedanīyaṃ^(~) karma katarat. karma yasyāṃ jā-
tau kṛtam u (pacitaṃ tasya tat) [karma] ṇ (os) (ta) s (y) ā (m
e) va jātav vipākam

(R 1) (upapadyavedanīyaṃ karma katarat. karma yasyāṃ) jātau
kṛtam upa [ci] t (aṃ) (tasya tat) karmaṇo (dvitīyā) yāṃ jātau
vi [pā] (kam)

北大文學部藏書

學業云何。謂學身語業及學思。

無學業云何。謂無學身語業及無學思。

非學非無學業云何。謂有漏身語業及有漏思。

見所斷業云何。謂若業隨信隨法行現觀邊忍所斷。此復云何。謂見所斷八十八隨眠相應思。

修所斷業云何。謂若業學見迹修所斷。此復云何。謂修所斷十隨眠相應思及彼等起身語業并不染汚有漏業。

非所斷業云何。謂無漏身語業及無漏思。

順現法受業云何。謂若業此生造作增長、彼業即於此生受異熟非餘生。是名順現法受業。

順次生受業云何。謂若業此生造作增長、彼業隨第二生受異熟非餘生。是名順次生受業。

- (2) (aparaparyāyavedaniyaṃ karma katarat) t. karma yasyā (ṃ)
jātau kṛtaṃ upa[ci]taṃ tasya tat karmaṇaḥ anukṛto ca karma
.....

- (3) sukhavedaniyaṃ karma katarat. karma¹⁾ pratisamyuktaṃ
kuśala (ṃ)

1) Lies: kāma-

- (4) (aduḥkhā) sukhavedaniyaṃ karma katarat. bṛhatphalaprati-
saṃ(yukta)

- (5) (kāyasmṛtyupasthānaṃ) katarat. daśa rū [pīṇy] (ā) [yata]-
nān (i) dharmāyaṭanapa(ryāpannaṃ rūpam)

- (6) (cittasmṛtyupa)[sthāna](ṃ katarat.) śaḍvijñānakāy (āḥ)
.....

順後次受業云何。謂若業此生造作增長、
彼業或隨第三生、或第四生、或復過此受
異熟非餘生。是名順後次受業。

順樂受業云何。謂欲界繫善業及色界繫乃
至第三靜慮地善業。

順苦受業云何。謂不善業。

順不苦不樂受業云何。謂第四靜慮地繫善
業及無色界繫善業。

^(s)身念住云何。謂十有色處及法處所攝色。

受念住云何。謂六受身。即眼觸所生受乃
至意觸所生受。

必念住云何。謂六識身。即眼識乃至意識。

法念住云何。謂受所不攝非色法處。

(111V1)

復次身増上所起善有漏無漏道。是名身念住。

(ida) m u[cy] (ate vedanasmityupasthānam)

受増上所起善有漏無漏道。是名受念住。

心増上所起善有漏無漏道。是名心念住。

(2) sāśravānāsraś ca [ida] m ucyate (dharma) smityupasthānam.

法増上所起善有漏無漏道。是名法念住。

漢訳ではこのあとに「復次緣身所起善有漏無漏慧。是名身念住。」云々の第三説を出す⁽⁹⁾が、玄奘訳の通りでは訳文の分量が断片に比べて多すぎるであろう。求那跋陀羅訳のように、恐らく原本は省略形で出されていて、欠けている部分に第三説が含まれると解される。求那跋陀羅の訳文は次の通りである。

「復次身増上彼道生善有漏及無漏。是名身念處。受心法増上彼道生善有漏及無漏。是名法念處。

復次緣身慧。是身念處。緣受心法慧。是法念處」(六五〇下)

.....

爲令已生惡不善法得永斷故勤修正斷云何。

(3) dharmāṇāṃ prahāṇādhipa[te] yo mā[ra] h samuṇḍa (h)

謂爲令已生惡不善法永斷増上所起善有漏無漏道。

.....

衆事分阿毘曇論ではこのあとに「是名已起惡不善法方便令斷正勤」を加えている。以下も同様であるが、この方が断片に合うであろう。集異門足論にも「是名第一」などの語が加えられている。

(4) anuṇṇanāṇāṃ pāpakāṇāṃ akusālanāṇāṃ dharmāṇāṃ

爲令未生惡不善法永不生故勤修正斷云何。

- (5) (mār) gaḥ samutpannaḥ kuśalaḥ sāsravānāsraṇaś ca idam
ucyate anutpannā(nām)
謂爲令未生惡不善法不生增上所起善有漏
無漏道。
- (6) (dharmāṇā) m utpādāya sa (mya) [kprahāṇa] m katarat.
anutpannānām kuśalānām dharmāṇām
..... (idam ucyate anutpannānām kuśalānām)
爲令未生善法生故勤修正斷云何。謂爲令
未生善法得生增上所起善有漏無漏道。
- (R 1) dharmāṇām utpādāya samyakprahāṇam.
utpannānām kuśalānām dharmāṇām sthitaye
(kata) (2) rat.
utpannānām kuśalānām dharmāṇām sthitaye asaṃmoṣāya
bhāvanā
爲令已生善法堅住不忘修滿倍復增廣智作
證故勤修正斷云何。謂爲令已生善法堅住
不忘修滿倍復增廣智證增上所起善有漏無
漏道。
- (3) idam ucyate utpannānām kuśalānām dharmāṇām sthita-
(ye).....
.....
欲三摩地斷行成就神足云何。謂欲增上所
起善有漏無漏道。
- (idam ucyate chanda) (4) samādhiprahāṇasaṃskārasamanvā-
gataḥ ṛddhipāda (ḥ)
求那跋陀羅訳は「云何欲定淨行成就如意足。謂欲增上彼道生善有漏及無漏。是名欲定淨行成就如意足。」とする。
こゝでもこの訳文の方が原文に近いであらう。
- (5) (sa) manvāgata ṛddhipādaḥ (chan) [daṃ v] iryaṃ cittaṃ
勤三摩地斷行成就神足云何。謂勤增上所

(mimāṇ)sāsamādhīprahāṇa ……

起善有漏無漏道。

心三摩地斷行成就神足云何。謂心增上所

起善有漏無漏道。

觀三摩地斷行成就神足云何。謂觀增上所
起善有漏無漏道。

ここでも求那跋陀羅は

「云何精進心慧定淨行成就如意足。謂慧等増上彼道生善有漏及無漏。是名慧定淨行成就如意足」(六五〇下—六五
一上)

断片の解説にはなお疑問を残すが(特に (chan) [can] の部分)、玄奘訳よりは求那跋陀羅の訳の方に近づけて解
釈するのが妥当であろう。次の場合も同様である。

初靜慮云何。謂初靜慮所攝善五蘊。

第二靜慮云何。謂第二靜慮所攝善五蘊。

第三靜慮云何。謂第三靜慮所攝善五蘊。

第四靜慮云何。謂第四靜慮所攝善五蘊。

(6) (tīti) yaṇ caturthaṇ dhyānaṇ katarat. [caturthe] na (dhyā-
nena) [gihī] (āḥ) kuśa [] (āḥ pañca skandhāḥ)

ここでも求那跋陀羅訳は

「云何初禪。謂初禪所攝善五陰。云何第一第三第四禪。謂乃至第四禪所攝善五陰。」(六五一上)

(1 (13) V)

苦聖諦云何。謂五取蘊。集聖諦云何。謂

(1) saṃkhyānirodhaḥ. mārga ……

有漏因。滅聖諦云何。謂擇滅。道聖諦云

品類足論の原文について

.....dham, 1)

1) dharmah? cp. Rosen, op. cit. Teil s. 16. Ann. 292.

maitri

(2) saṃskārāḥ

玄奘訳の「是名慈無量」は断片になく、求那跋陀羅訳にもない。以下の三無量についても玄奘訳は同じ形式をくり返しているが、断片も求那跋陀羅訳も省略形である。今は後者の訳のみを出す。

karuṇā muditopekṣā (katarā). upekṣā upekṣā

何。謂學無學法。

^①慈無量云何。謂慈及慈相應受想行識。若彼等起身語業。若彼等起心不相應行。是

名慈無量。

悲喜亦如是。云何捨。謂捨捨相應。若受想行識彼所起身口業。及彼所起心不相應行。(六五一上)

(3) (ākā) śāṇṇtyāyatanaṃ katarat. ākāśānaṃ (tva) ya [ta]
(naṃ)

空無邊處云何。此有二種。一定二生。此中所有受想行識。是名空無邊處。

玄奘訳の「是名云々」は求那跋陀羅訳に欠けること、及び以下の三について同じ形式をくり返すことは前項と同様である。断片及び求那跋陀羅訳は省略形によっており、次にはこれを示すにとどめる。

(4) (vijñānānaṃ) tṛyāyatanaṃ ākīpcaṇyātanaṃ naivasaṃjñānaḥ
saṃjñā (yatanaṃ)

識入處無所有入處亦如是。云何非想非非想入處。謂非想非非想入處有二種。謂正

(5) saṃskārā vijñānam.

受及受生彼相應法。若受想行識。是名非想非非想入處。

右において「是名」云々の文があるが、断片には見られない。

itaretaracīvarasaṃtuṣṭir āryavaṃśaḥ katarat. i (taretara)

隨所得衣喜足聖種云何。謂隨所得衣喜足增上所起善有漏無漏道。是名隨所得衣喜足聖種。

(6) (idam ucyate itareta) racīvarasaṃtuṣṭir āryavaṃśa (h)

求那跋陀羅訳も同様であるが次の三についてはやはり省略形である。これを対比する。

piṇḍapātaśayyāsanapra [hāṇāramatā bhā] vanā

云何隨乞得食及眠臥具等及樂閑靜樂修聖種。謂隨乞得食眠臥具等樂閑靜樂修業、增上彼道生善有漏及無漏。是名隨乞得食及眠臥具等及樂閑靜樂修聖種。(六五二上)

(R 1) (adhipa) teyo mārgaḥ samut[pa](nnaḥ) kuśala(h) sāsravo
'nā (sravaś ca. idam ucyate)

(2) (srot) āpattiphalam dvividham saṃskṛtam cāsaṃskṛtam
(ca). sa (ṃskṛta) sthāna āpa (ttiphalam)

預流果云何。此有二種。一有爲二無爲。有爲預流果云何。謂證預流果所有學法已正當得。

(idam ucyate) (3) saṃskṛtasthāna āpattiphalam.

無爲預流果云何。謂證預流果所有結斷已

asaṃskṛ (tasthāna ā) pattiphalam

北本多經部記略

(4) (i) dam ucyate a [saṃskṛ] ta (sthāna) āpatti (phalam). 正當得。是名預流果。

ここでは玄奘訳は「是名預流果」と云うのみであるが、求那跋陀羅訳は断片と同様に各別に「是名須陀洹有爲果」「是名須陀洹無爲果」(六五一上)としている。

他の三については断片、求那跋陀羅訳ともに省略形である。これを対比する。

(5) saṃskṛtam arhat(tv) am 如須陀洹沙門果斯陀含沙門果阿那含沙門

果亦如是。云何阿羅漢沙門果。謂阿羅漢果有二種。有爲及無爲。云何阿羅漢有爲果。謂證阿羅漢果若無學法已得今得當得。是名阿羅漢有爲果。云何阿羅漢無爲果。謂證阿羅漢果若諸結斷已得今得當得。是名阿羅漢無爲果

註

(1) Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden. Teil 1. Unter Mitarbeit von Walter Clawiter und Lore Holzmann herausgegeben und mit einer Einleitung versehen von Ernst Waldschmidt (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Bd. X, 1) Wiesbaden 1965. S. 266.

(2) Stache-Rosen, Valentina: Dogmatische Begriffsreihen im älteren Buddhismus II. Das Saṅgītisūtra und sein

Kommentar Saṅgītiparyāya. Teil 1. Berlin 1968. S. 208-12.

(3) op. cit. S. 37-38.

(4) 大正二六、六九四下以下。

(5) テキストは提示されたローマ字とイテとそれだものに従った。

(6) 大正二六、七一八上以下。

(7) cp. tatra dṛṣṭadharmavedaniyaṃ yatra janmani kṛtaṃ tatraiva vipacyate. upapadyavedaniyaṃ dvitiye janmani. aparaparyāyavedaniyaṃ tasmāt pareṇa.

Abhidharmakośa, p. 230¹⁻²

(8) 以下四法。「集異門足論」もほぼ対応する。(大正二六、三九一中以下。)しかし四法品のはじめにある部分は断片には欠けている。

(9) 「集異門足論」では単に「復次緣身慧名身念住」云々(三九

一下)と云う。

(10) 集異門足論では四聖諦と四無量の間に四想がある。この断片が四想を含めないこともまたこれが品類足論の断片であることとの証拠である。

三、俱舍論の中に引用された品類足論

俱舍論の中には多数の論書がしばしば引用されており、それについては詳細な研究がなされているが、⁽¹⁾近年刊行された梵本⁽²⁾によって品類足論からの引用梵文を漢訳文とともにまとめておきたい。品類足論のサンスクリット語原文が僅かの写本断片によって知られるにとどまる現状においては、この梵語資料の意義は少なくないであろう。

以下には引用であることが明示してある場合に限った。この外に実質的に同文とみなしうる場合があるが、これは引用とは別の問題であり、改めてとり上げることとする。配列の順序は品類足論にもとづく。⁽³⁾

一、第一品・弁五事品

“vāyudhātuh katamo, laghusamudiraṇatvam” iti Prakaraṇesu nirḍiṣṭam sūtre ca. (p. 8, 20-21)

(眞) 分別道理論云。「何者風界。所謂輕觸。」經說亦爾。(卷一、一六三下二八—二九)

(玄) 品類足論及契經言。「云何名風界。謂輕等動性」(卷一、三中一一—一二)

(衆) 云何風界。謂飄動。(卷一、六二七上二四)

(品) 風界云何。謂輕等動性。(卷一、六九二中一二)

Prakaraṇaṅgrantho 'py anuvṛto bhavati "caksuḥ katamat. caksurviḥṇaśrayo rūpaprasaḍaḥ." (p. 6. 4-5)

(眞) 順分別道理論。彼論云。「何者爲眼根。謂眼識依止清淨色。」(卷一、一六三上二一—二四)

(玄) 順品類足論。如彼論說。「云何眼根。眼識所依淨色爲性」(卷一、二中一九—二〇)

(衆) 云何眼根。謂眼識所依淨色卷。(一、六二七上二五)

(品) 眼根云何。謂眼識所依淨色。(卷一、六九二下二—二三)

Sāstre "sugandho durgandhaḥ samagandhaḥ" (p. 7. 6)

(眞) 阿毘達磨中說。「香有三種。謂香臭平等。」(卷一、一六三中二—一二)

(玄) 本論中說。「香有三種。好香惡香及平等香。」(卷一、二下二—一二)

(衆) 云何香。謂香若好若惡若中間。(卷一、六二七中五—六)

(品) 香云何。謂所有香若好香若惡香若平等香。(卷一、六九二下二—二三)

七種の慢を定義した後に俱舍論は発智論に言及する。すなわち発智論が「我勝」(śreyān asmi)「我等」(sadyo smi)など九種の慢類 mānavidhā を列挙して、かつこれらが結局、慢、過慢、卑慢に帰すると述べていることを紹介する。⁽⁴⁾しかし俱舍論はこれによらずして、次のように云う。

Prākaraṇaṃ tu nirdeśaṃ pariṅrhya śreyān asmity ekeṣu māno'pi syād atimāno'pi mānātimāno'pi
hīnasamaviśiṣṭāpekṣaya (p. 285. 12-14)

(眞) 若依分別道理論說、計我勝比慢、或慢或過慢或過過慢。由觀下等勝品人故。(卷一四、一二五五上二九一一二)

(玄) 依品類足釋慢類者、且我勝慢從三慢出。謂慢過慢過過慢。由觀劣等勝境別故。(卷一九、一〇一中三二五)

品類足論によつて義智論を批判しているのであり、その内容ははじめの定義に準じて理解しうるものである。称友もそのことを明言している。

Prakaraṇapādanirdeśaḥ. ko' sau. yo 'sau pūrvam uktaḥ. “hīnād viśiṣṭo' smi samena ve” -tyādinirdeśaḥ.
(p. 456. 28-29)

俱舍論の定義が品類足論のそれによつていのである。アビダルマ・ディーンは定義そのものを品類足論に委ねるにとどめている⁽⁵⁾。そこで俱舍論の定義を品類足論の文章の重要な参考資料としてみなすことが出来よう。

SAPTA MĀNAḤ (v, 10a)

māno' timāno mānātimāno' smimāno' bhimāna ūnamāno mithyāmānaśca. *abhedena cittasya-unnatir māna uktaḥ, sa pravṛttibhedāt saptadhā bhavati.* (1) hīnād viśiṣṭaḥ samena vā samo 'smīti manyamānasyonnatir mānaḥ. (2) samād viśiṣṭo 'smity atimānaḥ⁽⁶⁾. (3) viśiṣṭād viśiṣṭo 'smīti mānātimānaḥ. (4) pañcopādāna-skandhān ātmata ātmīyato vā manyamānasyāsmimānaḥ. (5) aprāpte viśeṣādhigame prāpto mayety abhimānaḥ. (6) bahvantaraviśiṣṭād alpāntarahīno' smity ūnamānaḥ. (7) aguṇavato guṇavān asmīti mithyāmānaḥ. (p. 284. 22-285. 4)

(眞) 偈曰。七慢。釋曰。何者爲七。一慢、二過慢、三過過慢、四我慢、五增上慢、六下慢、七邪慢。若不分別但

以心高爲慢。此心高由生起差別故成七種。(一)於下計自勝或與等計自同、若人如此分別起心高名慢。(二)於等計自勝名過慢。(三)於上品計自勝名過過慢。(四)於五取陰分別計是我及我所名我慢。(五)未至勝德計自己得名增上慢。(六)於多量勝計自少量劣名下慢。(七)實自無德計自有德名邪慢。(卷一四、二五四下二八以下)

(玄)頌曰。慢七……………。論曰。且慢隨眠差別有七。一慢、二過慢、三慢過慢、四我慢、五增上慢、六卑慢、七邪慢。令心高舉總立慢名。行轉不同故分七種。(一)於劣於等如其次第謂己爲勝、謂己爲等、令心高舉總說爲慢。(二)於等於勝如其次第謂勝謂等總名過慢。(三)於勝謂勝名慢過慢。(四)於五取蘊執我我所令心高舉名爲我慢。(五)於未證得殊勝德中謂己證得名增上慢。(六)於多分勝謂己少劣名爲卑慢。(七)於無德中謂己有德名爲邪慢。(卷一九、一〇一上九—二一)

(衆)云何慢結。有七慢。謂慢、增慢、我慢、我慢、增上慢、不如慢、邪慢。(一)云何慢。於卑謂勝、於勝謂相似。於彼起輕心、自舉。自高。是名慢。(二)云何增慢。於等謂勝、於勝謂等。……………是名增慢。(三)云何我慢。於勝謂勝。……………是名我慢。(四)云何我慢。於五受陰計我我所。……………是名我慢。(五)云何增上慢。未得勝法謂得、未到謂到。未觸謂觸、未證謂證。……………是名增上慢。(六)云何不如慢。於彼極勝謂小不如。……………是名不如慢。(七)云何邪慢。非德謂德。……………是名邪慢。如是七慢名慢結。(卷一、六二七下四—一六)

(品)慢結云何。謂七慢類。卽慢、過慢、慢過慢、我慢、增上慢、卑慢、邪慢。(一)慢者、於劣謂己勝、或於等謂己等。由此正慢已慢當慢、心高舉、心恃篋。(二)過慢者、於等謂己勝、或於勝謂己等。……………(三)慢過慢者、於勝謂己勝。……………(四)我慢者、於五取蘊等隨觀執我或我所。……………(五)增上慢者、於所未得上勝證法謂我已得、於所未至上勝證法謂我已至、於所未觸上勝證法謂我已觸、於所未證上勝證法謂我已證。……………(六)卑慢者、於他多勝謂自少劣。……………(七)邪慢者、於實無德謂我有德。……………(卷一、六九三上二九—中一五)

俱舍論の文は簡略であるが、省略によっていると解される。そのうち主な相違点は「衆」のみが慢について「於勝謂相似⁷⁾」としてゐること、梵本と「眞」は過慢について「於勝謂等」を言わないことが指摘される。前者については「衆」自身も第二慢について「於勝謂等」とするから、勝は等の誤りとして訂正すべきであろう。問題は後者であるが、ここで梵本、「眞」のグループと、「玄」及び品類足論関係の全ての漢訳のグループとに分かれる。従つて梵本に一致する形で説いた品類足論の存在を必らずしも否定し去ることは出来ないであろう。

Prakaraṇāsāstre tu

āhrikyam anapatrāpyam irśyāmātsaryasamudbhavaḥ,

kauṭṭyaṃ siyānamiddham ca paryavasthānam aśiadhā. (v, 47) (p. 312, 10-12)

(眞) 於分別道理論説、偈曰、無羞及無慚 妬恪及悼起 憂悔疲弱睡 倒起惑有八(卷一五、二六二下一四—一五)
(玄) 然品類足論説有八纏(卷二一、一〇九中二二)(偈と切り離してある)

梵本では品類足論の名を出しているが、ここでは引用文の意味においてではないと解すべきであろう。品類足論の文は散文である。

(衆) 云何纏。有八纏。謂睡眠掉悔慳嫉無慚無愧

於十纏中
無念覆也

(卷一、六二八中五—六)

(品) 纏有八種。謂惛沈悼舉睡眠惡作嫉慳無慚無愧。(卷一、六九三下二〇—二二)

“kṣayajñānaṃ katamat. duḥkhaṃ me pariñātaṃ iti jānāti. samudayaḥ prahiṇo mirodhaṃ sākṣātkṛto mārgo bhāvita iti jānāti. tad upādāya yat jñānaṃ darśanaṃ vidyā buddhir bodhiḥ prajñā āloko ’bhisamayam idaṃ

ucyate kṣayajñānam.

anupādajñānaṃ katanat. duḥkham me pariñātaṃ na punaḥ pariñheyam iti jānāti yāvat mārgo bhāvito na punaḥ bhāvayitavya iti. tad upādāya” iti vistareṇoktaṃ Śāstre. (p. 394. 7-11)⁽⁹⁾

(眞) 阿毘達磨藏云。「何者盡智。苦諦我已知厭。集諦我已斷除。滅諦我已證得。道諦我已修習。以此義是知見明覺慧解先正對觀是名盡智。

何者無生智。苦諦我已知厭、不更知厭乃至道諦我已修習、不更修習。以此義是知乃至正對觀是名無生智。」(卷一九、二八六中一三一—一九)

(玄) 如本論說。「云何盡智。謂無學位若正自知我已知苦我已斷集我已證滅我已修道。由此所有智見明覺慧光觀是名盡智。

云何無生智。謂正自知我已知苦不應更知廣說乃至我已修道不應更修。由此所有廣說乃至是名無生智」(卷二六、一三五上二三—二八)

(衆) 云何盡智。謂我已知苦。我已斷集。我已證滅。我已修道。於彼起智見明覺慧無間等是名盡智。

云何無生智。謂我已知苦。不復當知。我已斷集。不復當斷。我已證滅。不復當證。我已修道。不復當修。……。是名無生智。(卷一、六二八中二九—下六)

(品) 盡智云何。謂自遍知我已知苦我已斷集我已證滅我已修道。由此而起智見明覺慧光觀皆名盡智。

無生智云何。謂自遍知我已知苦不復當知我已斷集不復當斷我已證滅不復當證我已修道不復當修。……。皆名無生智。(卷一、六九四上八一—四)

tathā hy uktam “jīvitendriyaṃ katamat. traidhātukam āyur” iti. (p. 44. 7-8)

(眞) 經中說。「何者爲命根。謂三界壽。」(卷二、一七五上一八一—一九)

(玄)⁽¹⁰⁾ 如本論言。「云何命根。謂三界壽。」(卷三、一五下一四)

(衆) 云何命根。謂三界壽。(卷一、六二八下一九)

(品) 命根云何。謂三界壽。(卷一、六九四上一三)

cp. “sattvānāṃ sadṛśyaṃ nikāyasabhāga” ity asyaḥ Śāstre saṃjñā. (p. 67. 13)

(眞) 謂衆生等類。於阿毘達磨藏說此名謂聚同分。(卷三、一八二中二一一—一二)

(玄) 謂諸有情展轉類等。本論說此名衆同分。(卷五、二四上七—一八)

(衆) 云何種類。謂衆生種類。(卷一、六二八下一九—二〇)

(品) 衆同分云何。謂有情同類性。(卷一、六九四上一三—二四)

二、第四品・弁七事品

cp. akuṣalamahābhūmikāḥ tu pāṭhaprasaṅgenāsamhitāḥ⁽¹¹⁾. idāniṃ pūrvam na paṭhyante sma. (p. 146. 9-10)

(眞) 餘師說。如比善大地等者。由應文句。是故被引。今說先不說。(卷七、一一〇中一一—一二)

(玄) 餘說。如是大不善地法因誦引來。是今所增益非本所誦。(卷十、五三中一一—一二)

cp. Prakaraṇapāde mahābhūmikāḥ kuṣalamahābhūmikāḥ kleśamahābhūmikāḥ⁽¹²⁾ parittakleśamahābhūmikāḥ
ceti catur vidhā paṭhyante. (AKV. p. 309. 18-9)

後者について次を参照。

(衆) 十大地法、十煩惱大地法、十小煩惱大地法。(卷二、六三四上二一一二)
(品) 十大地法、十善地法、十煩惱地法、十小煩惱地法。(卷二、六九八中二八一二九)
「衆」と「品」との相違はすでに一般に注目されている点である。

三、第五品・弁隨眠品

Abhidharṃe 'pi cokaṃ "tribhiḥ sthānaiḥ kāmāgānuśayasyo'tpādo bhavati. kāmāgānuśayo 'prahiṇo bhavaty' aparijñātaḥ kāmāragaparyavasthānīyāśca dharmā ābhāsegatā bhavanti tatra cāyoniso manaskāra itī." (p. 376. 14-16)

(眞) 阿毘達磨藏說。「有由三處欲界隨眠欲生起上心。何者爲三。一欲界隨眠欲未得滅離。二隨欲界上心欲法對根現前。三於中起不如思惟。」(卷一八、二八一下一九一二二)

(玄) 阿毘達磨亦作是言。「欲貪隨眠由三處起。一欲貪隨眠未斷遍知故。二順彼纏法正現在前故。三於彼正起非理作意故。」(卷二五、一三〇中二五一一八)

(衆) 三處起欲愛使。此欲愛使不斷不知。欲愛纏所纏法。樂著境界。惡意思惟行。(卷三、六三七中二二一一三)
(品) 欲貪隨眠由三處起。一者欲貪隨眠未斷未遍知故。二者順欲貪纏法現在前故。三者於彼處有非理作意故。(卷

三、七〇二中一六一一九)

“ye ' nuśayāḥ kāmapratisaṃyuktā rūpapratisaṃyuktā lambaṇāḥ, kāmapratisaṃyuktā ārūpyapratisaṃyuktā-lambaṇāḥ, kāmapratisaṃyuktā rūpārūpyapratisaṃyuktā lambaṇā ' itī vacanāt. (p. 287. 12-14)

(眞) 如阿毘達磨藏云。「是惑於欲界相應有時能緣色界相應法爲境。是惑於欲界相應有時能緣無色界相應法爲境。是惑於欲界相應有時能緣色界無色界相應法爲境。」(卷一四、二五五下四—七)

(玄) 故本論言。「有諸隨眠。是欲界繫緣色界繫。有諸隨眠。是欲界繫緣無色界繫。有諸隨眠。是欲界繫緣色無色界繫。有諸隨眠。是色界繫緣無色界繫。」(卷一九、一〇一下二—二五)

(衆) 謂使欲界繫緣色界繫、欲界繫緣無色界繫、色界繫緣無色界繫、欲界繫緣色無色界繫。(卷四、六四四上一五—一七)

(品) 謂諸隨眠欲界繫緣色界繫。若諸隨眠欲界繫緣無色界繫。若諸隨眠色界繫緣無色界繫。若諸隨眠欲界繫緣色無色界繫。(卷五、七一一上二四—二七)

梵本と「眞」は一致し、「衆」と「品」とも一致する。「玄」は梵本に欠けて「衆」「品」にある色界繫の隨眠を最後に加えている。

四、第六品・弁攝等品

yat tathī Prakaraṇeṣūktam “abhiññā katamā. kuśalā prajñā” iti. (p. 423. 13-14)

(眞) 若爾於分別道理論中云何說。「何者爲通慧。謂善慧。」(卷二〇、二九四中二五—二六)

(玄) 若爾何故品類足言。「通云何。謂善慧。」(卷二七、一四三中一七—一八)

(衆) 通爾炎者、謂慧。(卷四、六四六下七)

(品) 通達者、謂善慧。(卷六、七一三下二八)

品類足論の原文について

Sāstre ca “śukla dharmāḥ katame, kuśala dharmā anivṛtavyakṛtāś ca” iti. (p. 235, 17-18)

(眞) 於阿毘達磨藏中說。「何者爲白法。善法及無覆無記法。」(卷一、二三九下一五一—一六)

(玄) 本論亦言。「云何白法。謂諸善法無覆無記。」(卷一六、八三下二二—二三)

(衆) 云何有罪法。謂不善法及隱沒無記。云何無罪法。謂善法及不隱沒無記。如有罪法無罪法黑法白法……亦如是。
(卷四、六四八上一五一—一八)

(品) 有罪法云何。謂不善及有覆無記法。無罪法云何。謂善及無覆無記法。黑、白法……亦爾。(卷六、七一五中二—二四)

kṣaṇikāḥ sambandhikāś ca yathā Prakaraṇeṣu “pratityasamutpādaḥ katamāḥ sarve saṃskṛtā dharmā” iti. (p. 133, 7-8)

(眞) 復說約剎那約相應如分別道理論說。(卷七、二〇五下二二—二三)

(玄) 復有說者。剎那連縛如品類足俱遍有爲。(卷九、四八下一六一—一七)

kiṃ punaḥ kārāṇaṃ Sūtre dvādaśāṅga uktaḥ. Prakaraṇeṣv anyathā “pratityasamutpādaḥ katamāḥ sarve saṃskṛtā dharmā” iti. (p. 133, 13-15)

(眞) 於分別道理論說異。彼論云。「何者爲緣生。謂一切有爲法。」(卷七、二〇五下一九—二二)

(玄) 何緣經說此十二支與品類足所說有異。如彼論說。「云何爲緣起。謂一切有爲乃至廣說。」(卷九、四八下二—二八)

(衆) 云何緣起法。謂有爲法。(卷四、六四八上二九—中二)
(品) 緣起法云何。謂有爲法。(卷六、七一五下四—五)

Abhidharṇe 'pi cōktaṃ "avastukā dharmāḥ katame, asaṃskṛtā dharmā" iti. (p. 94. 8-9)

(眞) 阿毘達磨藏亦說如此。彼藏云。「何者無類法。答無爲法。」(卷五、一九二下五—七)
(玄) 阿毘達磨亦作是言。「無事法云何。謂諸無爲法。」(卷六、三五上三一—四)
(衆) 云何無事無緣法。謂無爲法。」(卷四、六四八中二八—二九)
(品) 無事無緣法云何。謂無爲法。(卷六、七一六上四—五)

phalaṃ dharmāḥ, katame, "saṃskṛtā dharmāḥ pratisaṃkhyānirodhaś ca" iti Śāstram. (p. 91. 2. cp. p. 91. 24)

(眞) 何者爲果法。「一切有爲法及擇滅。」阿毘達磨藏文如此。(卷五、一九一上二七—二八)
(玄) 如本論說。「果法云何。謂諸有爲及與擇滅。」(卷六、三三下六—七)
(衆) 云何果法。謂一切有爲法及數滅。(卷四、六四九上二—三)
(品) 果法云何。謂一切有爲法及擇滅。(卷六、七一六中九—一〇)

Prakaraṇeṣūktaṃ "darśanaprahātavyahetukāḥ dharmāḥ katame, kliṣṭā dharmāḥ yaśca darśanaprahātavyānāṃ dharmāṇāṃ vipāka" iti. (p. 89. 7-8)

品類足論の原文について

- (眞) 於分別道理論說。「何法以見諦所滅惑爲因。諸染汚法及見諦所滅法果報。」(卷四、一九〇下三一五)
(玄) 故品類足說如是言。「云何見所斷爲因法。謂諸染汚法及見所斷法所惑異熟。」(卷六、三三下二二二四)
(衆) 云何見斷因法。謂穢汚法。若見所斷法報。(卷五、六四九中一六)
(品) 見所斷爲因法云何。謂一切染汚法及見所斷法異熟。(卷六、七一六下一六一一七)

Prakaraneṣu coktam “bhavāsravaḥ katamaḥ. avidyāṃ sthāpayitvā yāni tadanyāni rūpāṇyapatisamṃyuktāni samyojanabandhanānuśayopakleśaparavyasthānāni” iti. (p. 306. 13-15)

- (眞) 如分別道理論說。「何者爲有流。除無明是所餘諸惑與色無色界相應。謂結縛隨眠小惑倒起惑。」(卷一五、二六一上一六一一八)

- (玄) 品類足中亦作是說。「云何有漏。謂除無明餘色無色二界所繫結縛隨眠隨煩惱纏。」(卷二〇、一〇七下九一一一)

(衆) 云何有漏。謂除色無色界繫無明餘色無色界繫相應結縛使煩惱纏。是名有漏。(卷五、六五〇上一七一一九)

(品) 有漏云何。謂除色無色界繫無明諸餘色無色界繫結縛隨眠隨煩惱纏。是名有漏。(卷六、七二七中一八一一九)

俱舍論に無明の限定句を欠く以外は一致する。

Prakaraṇagrānthaś ca “kavaḍḍikāra āhāraḥ katamaḥ. yam kavaḍḍikāraṇaṃ pratityendriyāṇāṃ upacayo bhavati mahābhūtānaṃ ca viddhir yāpanā ’nuyāpaneti vistareṇa yāvad vijñānam.” (p. 155. 1-2. AKV. p. 320. 1-3)
(眞) 亦違分別道理論。彼論云。「何者爲段食。若緣此分段滋益諸根增長四大相續得愈及識亦爾。廣說如論。」(卷

八、二二三上五—七)

(玄) 又品類足言。「云何爲段食。謂能資益諸根大種廣說乃至識食亦爾。」(卷一〇、五五下二五—二六)

(衆) 云何麤搏食。謂搏食性。因彼食故。諸根增長。四大增長。隨養隨護。充足清明。是名搏食。……云何識食。……(卷五、六五一中一六—二二)

(品) 段食云何。謂緣段食諸根長養。大種增益。資助隨資助。充悅隨充悅。護隨護。轉隨轉。益隨益。是名段食。……識食云何。……(卷七、七一九上一六—二五)

Prakaraṇeṣūktam “……avyākṛtaheṭukā dharmāḥ katame avyākṛtāḥ saṃskṛtā dharmā akusālas ca” iti (p. 89, 7-9)

(眞) 於分別道理論說。「……何法以無記爲因。一切無記有爲法及諸惡。」(卷四、一九〇下五—六)

(玄) 故品類足說如是言。「……云何無記爲因法。謂諸無記有爲法及不善法。」(卷六、三二下二四—二五)

(衆) 云何無記因法。謂無記有爲法及不善法。(卷五、六五一下一四—一五)

(品) 無記爲因法云何。謂無記有爲及不善法。(卷七、七一九中二—)

Prakaraṇagrāho virudhyate “kathāvastūṇy aṣṭādaśabhir dhātubhiḥ saṃgrhitāni.” (p. 5.5 AKV, p. 21, 11-13)

(眞) 違分別道理論。彼論云。「言依入十八界攝」(卷一、一六二下一五—一六)

(玄) 違品類足論所說。彼說「言依十八界攝。」(卷一、二上一六—一七)

(衆) 三世及三世說事十八界十二入五陰攝……。 (卷七、六五九上六)

品類足論の原文について

(品) 三世三言依事十八界十二處五蘊攝……。 (卷九、七二八上二四)

Prakaraṇagranthas tarhi parihāryo gatiṣu “sarve ’nuśayā anuśerata” iti. (p. 114-115. AKV. p. 260. 2-3)

(眞) 若爾應救分別道理論。彼論云。於五道「一切隨眠惑緣起。」 (卷六、一九九中二六—二七)

(玄) 品類足論當云何通。彼說。五趣「一切隨眠所隨增」故。 (卷八、四二中九—一〇)

(衆) 地獄趣畜生餓鬼及人趣……欲界一切使使。天趣……三界一切使使。 (卷七、六六〇下二七—六六一上二)

(品) 地獄趣……欲界一切隨眠隨增。傍生趣鬼趣人趣亦爾。天趣……三界一切隨眠隨增。 (卷九、七三〇上一九—

二三)

五、第七品・并千問品

第七品からの引用文は同じ箇所が適宜に分けられて三箇所に分かれている。簡便のために、後に引く「品」を細かに区分して、それぞれの対応部分をその記号によって示した。

tathā Prakaraṇeṣūktam “……(A) duḥkhasatyam syāt satkāyadīṣṭhetukam na satkāyadīṣṭhetur iti vistaro yāvan (C) na. (a5) satkāyadīṣṭheḥ teṣāṃ ca dharmāṇāṃ jātiṃ jarāṃ sṭhitim anityatāṃ ca sthāpayivā (a6) yat tadanyat kliṣṭaṃ duḥkhasatyam ” iti. (p. 89. 7-11)

(眞) 於分別道理論說。「……(A)有法以苦為因。以身見為因非身見因(C)不。廣說如彼論。乃至云(a5)除身見及諸餘法生老住滅(a6)所有別染汚苦諦。」 (卷四、一九〇下七—九)

(玄) 故品類足說如是言。「……(A)或有苦諦以有身見為因。非與有身見為因。廣說乃至。(a5)除未來有身見及彼相應法生老住無常(a6)諸餘染汚苦諦。」 (卷六、三二下二五—二七)

ītakaraṇagrān̥tho hy evaṃ virudhate. “(a1) syād duḥkhasatyam satkāyadīṣīhetukaṃ na satkāyadīṣīś
hetuḥ. (a5) satkāyadīṣīś tatsamprayuktānāṃ ca dharmāṇāṃ jātūṃ jarāṃ s̥thitūṃ anityatāṃ ca sthāpayitvā⁽¹²⁾
(a6) yat tadanyat kīṣiṣaṃ duḥkhasatyam. (b1) satkāyadīṣīhetukaṃ satkāyadīṣīś ca hetuḥ (b2) yad etat
sthāpitam” iti. (p. 84. 9-12)

(眞) 違分別道理論。論云。「(A) 有法以身見爲因、不爲身見因。(a5) 除身見及身見相應法生老住滅(a6) 若有所餘染汚苦諦。
(b1) 以身見爲因、亦作身見因、(b2) 是所除法。」(卷四、一八八下一六一二〇)

(玄) 違品類足論所說故。如彼論言「(a1) 或有苦諦以有身見爲因、非與有身見爲因。(a5) 除未來有身見及彼相應法生老
住非常(a6) 諸餘染汚苦諦。(b1) 或有苦諦以有身見爲因亦與有身見爲因(b2) 卽所除法。」(卷六、三〇下二二一六)

yat tarhiḍam uktam “(a4) anāgatānāṃ satkāyadīṣīṣiṃ tatsamprayuktam ca duḥkhasatyam sthāpayitvā⁽¹⁷⁾

(a6) yat tadanyat kīṣiṣaṃ duḥkhasatyam (a1) tat satkāyadīṣīhetukaṃ na satkāyadīṣīś hetuḥ (b2) yat tu
sthāpitam (b2) tat satkāyadīṣīhetukaṃ satkāyadīṣīś ca hetuḥ” iti. (p. 86. 11-13)

(眞) 復次若爾云何說此文。「(a4) 除未來身見及身見相應苦諦(a6) 所餘染汚苦諦。(a1) 此以身見爲因非身見因。(b2) 是所除
b1) 此以身見爲因亦是身見因。」(卷四、一八九中二五—二八)

(玄) 若爾何故品類足說。「(a1) 或有苦諦、以有身見爲因非與有身見爲因。(a4) 除未來有身見及彼相應苦諦(a6) 諸餘染汚
苦諦。(b1) 或有苦諦。以有身見爲因亦與有身見爲因。(b2) 卽所除法。」(卷六、三二下五一九)
(衆) (A) 苦諦、或身見是彼因彼非身見因。(B) 或身見是彼因彼亦身見因。(C) 或身見非彼因彼亦非身見因。

品類足論の原文について

- (a1) 身見は彼因彼非身見因者。(2) 謂除過去現在見苦斷使彼相應苦諦。(3) 除過去現在見集斷一切遍使彼相應苦諦。(4) 除未來身見相應苦諦、(5) 除身見生住異滅及彼相應法生住異滅、(6) 若諸餘穢汚苦諦。
- (b1) 身見は彼因彼亦身見因者。(2) 謂前所除爾所法。(卷一〇、六七三中二〇—二八)
- (品)(A) 謂苦聖諦。或有身見爲因非有身見因。(B) 或有身見爲因亦有身見因。(C) 或非有身見爲因非有身見因。
- (a1) 有身見爲因非有身見因者。(2) 謂除過去現在見苦所斷隨眠及彼相應俱有等苦諦。(3) 亦除過去現在見集所斷遍行隨眠及彼相應俱有苦諦。(4) 亦除未來有身見相應苦諦。(5) 亦除未來有身見及彼相應法生老住無常。(6) 諸餘染汚苦諦。
- (b1) 有身見爲因亦有身見因者。(2) 謂前所除苦諦(卷一三、七四五上二七—中六)

註

- (1) 『証導本』及び『L'Abhidharma-kośa de Vasubandhu. Mélanges sin : L'Abhidharma-kośa de Vasubandhu. Mélanges Chinois et Bouddhique, vol. xvi. Nouvelle édition 1971 荻原雲來・木村泰賢『国訳大藏經』論部第十一—十三卷、西義雄『国訳一切経』毘曇部二十五—二十六卷、渡辺雄雄『有部阿毘達磨論の研究』五一頁以下などを参照。
- (2) P. Pradham, ed.: Abhidharma-Kośabhāṣya. Tibetan Sanskrit Works Series vol. VIII. Patna 1967. cf Abhidharma-kośa & Bhāṣya of āchārya Vasubandhu with Sphuṭārthā commentary of Ācārya Yaśomitra, ed. by
- (3) 次の略号を用いる。眞—眞諦訳俱舍論。玄—玄奘訳俱舍論。衆—衆事分阿毘曇論。品—品類足論。梵文は特に断りのなきは Pradhan の刊本を指す。AKV.-Sphuṭārthā Abhidharma-kośa-vyākhyā, ed. by Urai Wogihara.
- (4) 梵本 p. 285. 4ff. 「眞」卷一四、二五五上七以下、「玄」卷一九、一〇一上二以下。
- (5) eṭeṣāṃ prapañco yathā Prakaraṇeṣu, Abhidharma-dīpa, p. 236. 15.
- (6) abhimanāḥ を註出。

- (7) 「五法行經」(大正二八・九九九中二五)「五事論」(同・九九六中二三)にもこれを説く。
- (8) 「如者等」(「五法行經」九九九中二三)「於等計等」(「五事論」九九六中二〇)
- (9) cp. AKV. p. 614. 30; 615. 1.
- (10) なお「眞」卷四(一八四下六—七)「阿毘達磨中説」「玄」卷五(二六上二五—二六「對法言」)にも同文の引用がある。
- (11) *āsaññitāh* を「正々」²⁰ AKV. p. 309. 16. *Abhidharma-kośa* with *Sphuṭārthā* p. 478. 1.
- (12) *Abhidharma-kośa* with *Sphuṭārthā* (p. 478. 7) は *kleśa-kuśalamahabhūmihāh* とする。
- (13) *abhidharmadīpa* (p. 147. 2) は *śuklādharma* とする。
- (14) (玄)(品)のみに「未來」があるが、梵本(眞)(衆)には欠く。チベット訳にも欠く。影印北京版一一五卷、一五八頁三、一、一五六頁二、四。
- (15) 「彼相應法」を読まない『品類足論』がある。『俱舍論』同所、『婆沙論』(大正二七、八一下)参照。
- (16) *na satkāyadister hetuḥ* が付加されているが除く。AKV. p. 193. 27. *Abhidharma-kośa* with *Sphuṭārthā* p. 286 n. 1.
- (17) 「彼相應」を読むのは現存『品類足論』とは別の読み方であり、『俱舍論』を批判している。

四、阿毘曇五法行經の前文について

安世高訳・阿毘曇五法行經が五事論の異訳であることには問題がないが、その前文とも言うべき部分は他に例を見ないものであるために、これが本来五事論にそなわっていたものかどうかを検討されねばならない。五事論が本来単行していたであろうこと、安世高訳が最も古い翻譯であること、などから、五事論そのものの形態上の変遷を考えるべきか否か、という問題を提起するからである。ところでこの前文は大正藏經で五六行あるが、その内容は苦法點可(新訳で云う苦法智忍)・苦法點以下四諦に関する法點可・法點の説明であって、その中で非常・苦・空・非身、四諦が解説されている。その直後に通常の五事論に相当する文が続く。この前後の脈絡は明瞭とは言えず、五事論に相当

品類足論の原文について

する文の中にも十智等があるが、それとの関連も本書の中では全く見出されない。

前文と本文との関係について特に積極的な見解を述べておられるのは福原亮巖博士⁽¹⁾である。博士は「五事毘婆沙論」⁽²⁾において法救が造論の目的として「略に依りて自共相を覚らしめ」ることを挙げ、諸法の自相・共相とは「堅湿煖等」は是れ諸法の自相なり。無常苦等は是れ諸法の共相なり」と述べていることをふまえて、前文がここに云う共相に相当するものと解され、五事論の「原型は、現存の『五法行經』の通りに、八智、無常・苦・空・無我、四諦等（共相）を五事の開説に先行せしめているものであったらうと推量される」と述べておられる⁽³⁾。

しかし、右のように解するとしても、十智の中で「共相」に相当する内容が説明されているのであるから、前文においてこれが特に説かるべき積極的な理由は見出し難いと思われる。さらに五事論の本文は文体上も特色ある論書⁽⁴⁾であって、前文とは性格を異にしていると解される。そこで前文の問題は別の角度から検討されねばならないと考える。安世高の訳出した經典三十五部⁽⁵⁾の中で品類足論に關係を有するかも知れないものは外に七法經、五法經、阿毘曇九十八結經である。

次にこれらを経録に従って見てみよう。

一、『出三藏記集』卷二（大正五五・六上—中）

阿毘曇五法經一卷 舊錄云阿毘曇五法行經

七法經一卷 舊錄云阿毘曇七法行經或云七法行 今闕此經

五法經一卷

阿毘曇九十八結經一卷 今闕

同じ巻に収める新集異出經錄においては次の記載がある。（同、一五上）

阿毘曇安世高出阿毘曇五法七法二卷今闕七法阿毘曇九十八法一卷闕

二、『衆經目錄』（法經錄）卷三（同・一二八中）

七法經一卷後漢世安世高譯

五法經一卷後漢世安世高譯

三、『歷代三寶記』卷一（大正四九・五〇中ノ下、五二上）

阿毘曇五法經一卷舊錄云阿毘曇五法行經出長阿含見祐錄

七法經一卷舊云阿毘曇七法行經出長阿含成云七法行見祐錄

阿毘曇九十八結經一卷見僧祐錄

五法經一卷見僧祐錄

四、『衆經目錄』（仁壽錄）卷五（同・一七八上）

七法經一卷後漢世安世高譯

五、『大唐內典錄』卷一（同・二二一中、二二三下、二二三中）

七法經一卷舊錄云阿毘曇七法行經出長阿含或直云七法行見祐錄

阿毘曇九十八結經一卷見僧祐錄

五法經見僧祐錄

阿毘曇五法行經或云阿毘曇五法經出長阿含

なお卷七（三〇二上）卷八（三二二中）卷九（三三五下）を参照。

六、『古今譯經圖紀』卷一（同・三四九上）

品類足論の原文について

阿毘曇五法經一卷

七法經一卷

阿毘曇九十八結經一卷

七、『大周刊定衆經目錄』卷八（同・四二二下）卷十（同・四三四中）

阿毘曇五法經一卷 舊錄云阿毘曇五法行經

七法經一卷 舊錄云阿毘曇七法行經

阿毘曇九十八結法一卷 長房錄云阿毘曇九十八結經

なお卷一二（同・四四五上、四五八中）に阿毘曇五法論一卷を出している。

八、『開元釋教錄』卷一（同・四八〇中、下）

阿毘曇五法行經一卷 或無行字亦云阿毘曇苦慧經見僧祐錄

これ「已上見存」であるが、「已下闕本」の中に

五法經一卷 見僧祐錄

阿毘曇九十八結經一卷 見僧祐錄

なお卷一五（同・六四一下）を参照。

九、『開元釋教錄略出』卷四（同・七四五上）

阿毘曇五法行經一卷 亦云阿毘曇苦惠經或無行字

十、『貞元新定釋教目錄』卷一（同・七七七中）卷二（同・七七七下、七七八上）

阿毘曇五法行經一卷 或無行字見僧祐錄已上見存已下闕本

七法經一卷 舊錄云阿毘曇七法行經或直云七法行經見僧祐錄房云出長阿含

五法經一卷 見僧祐錄

阿毘曇九十八結經一卷 見僧祐錄

なお卷三十(同・一〇四五上)には

阿毘曇五法行經一卷 亦云阿毘曇苦慧經十一紙亦云阿毘曇五法經

以上、經錄の中から抽出したが、網羅的ではない。しかし阿毘曇五法行經以外は早くに欠本となったことが知られる。その中で阿毘曇九十八結經については道安が「似世高撰」と述べているが、道安みずからもその注釈を著した。⁽⁷⁾阿毘曇五法行經についても幾つかの研究書が作られたらしい。經錄の中で気づいたものを記すと左の通りである。

抄阿毘曇五法行經一卷 齊竟陵文宣王所抄『出三』卷五(大正五五・三八上)『大唐内典錄』卷十(同・三三五上)『開元釋教錄』卷十八(同・六七九下)

阿毘曇五法行義 謝慶緒『出三』卷一二(同・八四中)

阿毘曇五法一卷 蕭子良『衆經目錄』卷五(同・一四四上)

異阿毘曇五法經一卷 蕭子良『衆經目錄』卷四(同・一七五上)

従って本書はある程度読まれていたことが知られる。

しかるに經錄が前に記してあるように、本書を阿毘曇苦慧經とも呼んでいることは何を意味するのであろうか。

『開元釋教錄』『開元釋教錄略出』がそうであり、『貞元錄』卷一では『開元錄』から「亦云阿毘曇苦慧經」を削除

品類足論の原文について

しているが、卷三十では阿毘曇苦慧經、阿毘曇五法經を別名として出して出している。

ところどころかかる扱い方は『大周刊定衆經目錄』卷七（四〇九上）によると宝唱錄に由来するのであろう。そこには次のように記されている。

阿毘曇苦慧經一卷一名毘曇五法行經

右後漢代安世高譯。出寶唱錄

阿毘曇苦慧經の名は独立の經典としては他に見えないようであるが、苦慧經は『出三藏記集』以来多くの經錄に記されている。しかしいづれも欠本であり、その内容を知ることが出来ない。

經錄から知られるのは以上である。そこで阿毘曇五法行經が何故阿毘曇苦慧經の名と結びついているのかが問題とされる。単純な別名と考えることも可能であらう。五法行經が苦法點可にはじまるものであることは前述の通りである。しかしそれをもって別名とした、とするよりは、前文そのものが本来苦慧經であった、と推定することの方がより大きな蓋然性があるように思われる。すなわち、かなり早い時期から苦慧經が五法行經と結びついて伝えられたために、後代において両者があるいは独立に、あるいは相互に他の異名として扱われるという混乱を生じたのであろう。従つて五法行經の前文は苦慧經であり、五法行經から切り離して扱うべきものであろう。

右の推定にはなお種々の問題が附随し、全体的解明は詳細な検討をまたねばならないが、

一、前文は文体上からも、内容からも本文から切り離す方が理解しやすい。

二、經錄の記載から、本文に別のものが附加されたという推定を否定しえない。

という二点にもとづく仮説として提出したい。

註

- (1) 福原亮藏博士『有部阿毘達磨論書の發達』一五五—八頁参照。
- (2) 大正二八・九八九中。
- (3) 前掲書、一五八頁。
- (4) 拙稿「品類足論の成立試論」(二)、『三藏』一二〇、六頁参照。この問題については改めて詳論したい。
- (5) 林屋友次郎『経録研究 前篇』三九〇—九二頁、塚本善隆『中国仏教通史』第一卷、九〇—九三頁参照。
- (6) 『出三藏記集』卷二(大正五五・六中)
- (7) 塚本博士、前掲書、五三六頁参照。
- (8) 『出三藏記集』卷四(大正五五、三五上)『衆經目錄』卷五(同、一四三下)『衆經目錄』卷三(同、一七一中)『衆經目錄』卷三(同、二〇六上)『大周刊定衆經目錄』卷十二(同、四五六中)『開元釋教錄』卷五、十五(同、五三四中、六四七上)『貞元新定釋教目錄』卷八、二十五(同、八三一下、九八三七)など。